

槐

かい

岡井省二創刊

平成22年7月号

平成二十二年七月一日発行 第二十卷第七号 通巻第三一九号（毎月一回一日発行）
平成二十三年九月十八日第三種郵便物認可



落し蓋

高橋将夫

落し蓋ほどの責任万愚節
包丁で手招きされし目借時
剪定の鋏は円を描きけり
凸凹のどちらにも主役春の雲

春潮に浮かぶ魚の浮き袋
待つことに慣れて栄螺となりけり
騙し絵の中の老婆と花の精
頬白と目白の仲は知らざりき
雲に入る鳥を見守る鴉かな
一切は顛倒夢想春の雲
奥の院をはるかに春の虚空かな

第十九回 槐賞発表

白妙に青き精霊七日粥

富松 寛子

冬木の芽子に泣く力飲む力

月光や肺しろがねに染まるまで

氷水うごき沈黙ほぐれけり

雲海やわれら雲中菩薩なる

槐安集

水野恒彦

鳥雲にははのかたちにははの骨
亀鳴くと水平線は曇りをり
綿津見のいろ密かなり桜貝
父病みて白炎となる山櫻
恍惚と夜明けの冷を白牡丹

延広禎一

元勳の花押に櫻吹雪かな
花吹雪修羅と風雅の間かな
流れ鮑の瀬戸の渡りや放哉忌
蟻地獄化して雲中菩薩かな
春筍を焼き嘯の口となる



加藤みき

砂の上に直立不動松落葉
ひよひよの赤き葉櫻にごり空
逃げ水に踏み込んでゆく手足かな
青嵐 孟宗 竹の鏡 獅子
柿若葉日陰の土の匂ひたる

石脇みはる

あたたかや等伯展め猿猴図
春寒やはぶ酒一杯ふるまはる
春蘭の七八年のほほけけり
薪割のうしろに著莪の葉騒あり
蓮の葉に乗りそこねたる蛙かな

中島陽華

眩きの生れて壇上さくらかな
猫舌やぼつてり咲いた八重櫻
春の闇火焰太鼓の鳴りにけり
助六の睨み間近や遅櫻
着物の腋に羨あり櫻咲く

竹内悦子

花嫁の横を豆腐屋春の昼
菜の花や西も東も山は晴
上手から水音こぼるる金鳳華
土砂降りの殺生石と花卯月
真夜中のひょうたん櫻と北斗星

栗栖恵通子

鍵穴のうちそと余寒居座りぬ
鳳凰に蹴爪ありけり霾ぐもり
仙人の落ちた穴あり春の雲
天空にさくら懸けたる中千本
春遅々と脇に置きたる袋菓子

大島翠木

やんぬるかな我が青春は蛇苺
花の息たしかむ落花止むときに
まむし草に舌ゆるかりき鉦穴
はだれ嶺の滝や井上ひさし逝く
鳥雲や誰彼遠く置き去りに

雨村敏子

万華鏡に一瞬の永久春水
鰻頭や峯の櫻と言霊と
道草の毛虫同行二人かな
抱卵の胸毛吹かるる金峰山
朧夜の海綿水を吸うてをる

小形さとる

孤り居といふはおぼろに縛さるる
陽炎ひて耳成山の匂ひかな
白むくげ歩き呆けの男なり
鳥雲によき往生と思ふなり
春意かな尾鱈あたりが痒うなる

本多俊子

海神は光の器鳥帰る
圃に麦の青さが染みてくる
天上に音の満ちくる初ざくら
樟若葉五体ゆるみてきたりけり
花りんご縄文土偶のつぶらな眼

久津見風牛

まだ淵にとどまりをるや花筏
夕桜われに楽器を与へかし
太陽を代田に置きて去りゆけり
百姓のむかしは蛭に血を頒つ
約束の海市見るまで惚けられず

近藤きくえ

花満ちて埴輪のまなこ虚なる
花と雪女神の遊びごころかな
蛙石花びらまとひをりにけり
波音は風のささやき鳥雲に
青柳の影に風音生れにけり

近藤喜子

観潮や写楽の眼みつけたる
春愁の静かに立つてをりし過去
金色の眠りに落つる遍路かな
初虹や飛鳥美人の肩ひ巾れのいろ
精霊のひそやかな舞ひ風光る

谷村幸子

白檀の薬師如来や草の餅
雲母坂遠目にしたり花は葉に
釣殿の巫女の舞みて濃山吹
春光や文殊名物智恵の餅
般若経おさめし後の山桜

瀬川公馨

万園が花の柑禍となりゐたり
早蕨の闇を離るる音したり
児雷也のもんもん紋助なりしかな
春の日やあしたはあした紺屋染め
茶坊主とペンペン草とラテンかな

久保東海司

花筏樟指す程の流れなし
甘茶佛息繼ぐひまもなかりけり
葱坊主ひとつふたつは拗ねてをり
ものの芽の朝日に影をとどむ程
胡坐ひとり許されてゐる雛の宴

松原仲子

紫木蓮花の弾けし鬼火かも
朧夜の夢食べてゐる鏡の間
麦笛や光つめたき瓶の底
山百合の一花に咽ぶ真の闇
夜鷹啼きわが影うすく誘はれし



槐市集

近藤 公子

ちちとはは吉野桜となりにつけり
花吹雪胸にあふるる月日かな
桜満開黒留袖を注文す
天に咲く泰山木やちちはどこ
はつなつの光と水とわがこころ

近藤 紀子

春耕の黒土かわく早さかな
酒蔵のおぼろや土間に人のこゑ
桜薬とのど飴二つ手の平に
春愁や白き肌の蓮根にも
旅に会ひし人の訃報や花筏

柴田 靖子

筍を心待ちして酒の爛
咲きそろひ己を語る葎の花
実豌豆旅に出たしとはじけ飛び
花梔子雨うちはらひ匂ひくる
青葉背負ひ一目散に初鯉

庄司 久美子

初燕八百比丘尼の赤草履
蜂の巣や奇岩のひとつ天をさす
初蛙屋根の摩詞^ま迦羅^か大笑ひ
山に沿ふ登り窯なり花吹雪
鳥曇命育くむ海の穴



槐集

高橋将夫選

春霞を出囃子として雨女 守口 柳川 晋

我が廬へ乗つ込み給ふ花見鯛

花見酒を時の流れに一ト垂らし

主義主張無くて七癖五月祭

テネシーワルツ流れて一つ春が逝く

桃の花なだれて卑弥呼追ひにけり 岡崎 寺田すず江

魚島の辺結界のなかりけり

朧夜の客人となり還らざり

一世見し櫻の蕊の降りしきる

未来凶に想ひを馳せり山笑ふ

春塵のひかりの中の虚遮那仏 枚方 富松 寛子

ねころんで春のぞめきを聞いてをり

たれかれと溶け合うてをる花の下

さみじりのトンボ玉より春霞

捨つべきは捨て竜天に登りけり

わが胸に春の小川を通しやる 安城 近藤 公子

大壺に春愁そつと入れにけり

思ひ直し白き帆を張る暮春かな

画布に白き直線夏に入る

太宰忌や河は音なく流れをる

耕人のきらりと光る言葉かな 枚方 中野 京子

白木蓮仰ぐ命のありがたさ

花びらをころがす風とゆく日かな

可といへず不可ともいへず水温む

日没の闇は光に春はゆく

一管の笛に後シテ朧かな 東京 西村 純太

藤ゆれて光のゆれて無明なる

鳴釜の神事の空の花吹雪

身を投げて海市の人となりにける

亀鳴くや己も鳴くや闇へだて

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

春霞を出囃子として雨女 柳川 晋
せつかく出かけようとしたら霞が降ってきた。霞の音を出囃子と捉えたところが面白い。開き直りといったところ。自分は雨女、雨男と思っている人は案外多いようだ。もう一句、

〈主 義 主 張 無 くて 七 癖 五 月 祭 晋〉

朧夜の客人となり還らざり 寺田すず江
朧月夜の客人とはなんとも風流。時を忘れて帰ってこない。いや、どうもそうではなさそう。恐い話だ。

捨つべきは捨て竜天に登りけり 富松 寛子
例え強がりであったとしても、捨てるべきは捨てるいさぎよさに心打たれる。

わが胸に春の小川を通しやる 近藤 公子
小川がさらさら流れる感じから、春を迎える作者の心のありようがリアルに伝わってくる。

可といへず不可ともいへず水温む 中野 京子
可もなく不可もないと言われると、なんだか自分の人生を言われているような気になる。「水温む」はまさにぴったり。

亀鳴くや己も鳴くや闇へだて 西村 純太
闇を隔てて鳴くやという尋常ではないが、闇の向こうで鳴く

のが亀ならさしたることもなさそう。俳諧。

命継ぐさくらも人も海に向き 大山 里
花も人も海を向いて命が引き継がれてゆくという。そういえば、命は海から来たのだ。

振り返るとき春愁の忘れ潮 岩月優美子
潮が引いたとき岩の窪みに取り残された海水…忘れ潮である。どうやら、春愁が忘れ潮のようにいつまでも作者の心に残っているようだ。それなら、振り返らないで前だけみていよう。

手応への命つかみし蛙かな 中田 禎子
子供のころ、小川の石の間に手を入れて小鮒を捕まえたと思ったらイモリだった思い出が有る。掲句は蛙だが、掴んだときの感触たるや、想像に難くない。

春惜しむクリオネ仮面舞踏会 近藤 紀子
北の海でクリオネが泳ぐ姿はなるほど仮面舞踏会のようにだ。行く春を惜しんで踊り明かす姿なのだろう。

夜桜に業平小町行き交へる 谷岡 尚美
花見をしなから行き交う人々を見てみると、たしかに業平や小町気取りの人もあちこちにいる。

木蓮の百の蕾をかかげたる 岩下芳子
青空に咲く木蓮を、その前段階の「百の蕾」で捉えたところが手柄。満開の木蓮が想像される。